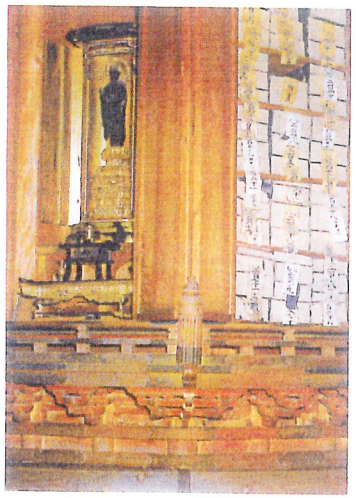
輪転経蔵



輪転経蔵（内部）

3-2

10　春日神社本殿

所　在　地　　中番下番入会地1－1　春日神社

指定年月日　　平成8年3月28日

所　有　者　　春日神社

当社は、中世興福寺領河口庄十郷にあった春日神社の総鎮守社で、「お春日さん」と呼ばれ、崇敬されている。『春日神廟記』によれば、天永元年（1110）勅旨中納言藤原時実以下、興福寺の衆徒観如僧都や僧侶80余名、そして奈良春日社の大連社官中務丞藤原国等ら社士480名余が下向し、当社が遷座されたという。

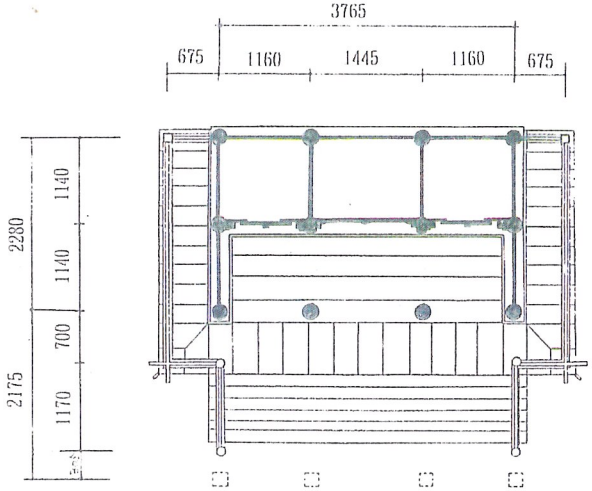
本殿は、柿葺の三間社流造で、正面が三間（約3.77ｍ）、側面が二間（2.28ｍ）の身舎に、三間の向拝がつく（向拝柱は取り去られ、その上方に付いていた手挟だけが残る）。身舎内部は後方一間を内陣（神棚）、前方を前室とする。前室の前方は開放されているが、柱の風食や痕跡から以前はここに建具が入っていたことがわかる。

正面と両側面に縁が回り、側面背後には脇障子がたつ。縁の手すりは蹴高欄で、前方木階部の親柱は擬宝珠つきである。内陣正面の３柱間はそれぞれ両開きの板戸で閉ざされ、側面と背面は横羽目の板壁である。身舎柱は欅の丸柱で、柱上の組物は拳鼻付平三つ斗、その大斗や升、肘木には彩色の跡が残る。中備えは蟇股で、これら細部形式は江戸初期から中期にかけての様相を呈している。

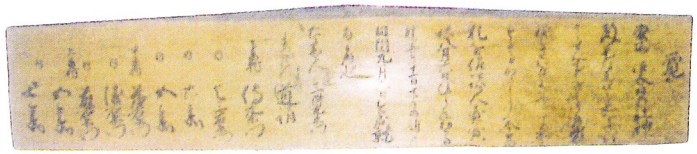
屋根裏から見つかった上棟札(じょうとうふだ)によると、建築年代は元禄12年(1699)、大工は伊井村の杉原加右衛門・同七右衛門ら6名であった。さらに興味深いのは「富札」すなわち「宝くじ」を興行し、造営費用を捻出していたことである。

向拝(こうはい)や身舎(もや)正面の間仕切(まじき)りに改変があるが、蟇股(かえるまた)や木鼻(きばな)など細部形式は古式を留めている。17世紀最末期に遡(さかのぼ)る県内有数の三間社流造(さんげんしゃながれづくり)の古社として貴重な遺構である。

春日神社本殿



平面図



上棟札(元禄12年)

覚

当所　御春日乃社、神殿是なきヲ以、これをさいそうせん事をはかる、然共我々ざいカようして修する事かたし、ゆへニ今富札を作、諸人資買秋八月六日ニひらきあくる卯ノ正月十一日ニてうの始メ同閏九月六日ニ令成就る者也

たう番人　大連　三郎左衛門
手つ代人　中番村　道請
下番村　傅左衛門
同　与三右衛門
同　六兵衛
同　五兵衛
中番村　茂右衛門
同　徳右衛門
同　藤右衛門
上番村　五兵衛
同　七兵衛

19　薬師如来立像
20　阿弥陀如来立像

所　在　地　　中番下番入会地1-1　春日神社

指定年月日　　昭和56年2月20日

所　有　者　　春日神社

この二体の像は、本荘地区春日神社に安置されている。この地はその昔興福寺の荘園であり、春日神社は河口十郷の総社として地域最大の信仰を集めていた。

薬師如来立像は、平安時代の頃から神仏混淆の形で信仰されたものと考えられる。高さ39㎝の小像であるが、螺髪は、京都嵯峨野の清涼寺式であり、文化の広がりを知る上で貴重なものである。

阿弥陀如来は、当社の中尊で、その来迎相は中品下生で、県内ではこの像のみである。像の高さは95㎝で、様式から鎌倉末期のものと推定される。整った刀法と静止的で温和な表現は慶派の手法に通じており、春日神社の故地、南都（奈良）との深い関係がうかがえる。

薬師如来立像

阿弥陀如来立像